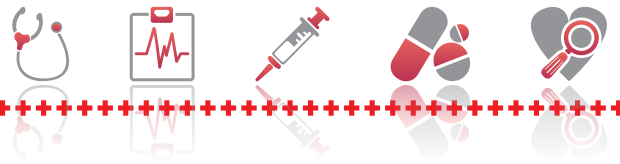


# 新救急診療の現場から



救急医による  
リレー連載

## こんな症例、 あなたならどうする？

### 第6回 高/低ナトリウム血症へのアプローチ (前編)

執筆：小林 良・松方 聡 / 監修：塗木 貴臣 (TRVA夜間救急動物医療センター)



#### はじめに

私(小林)は2009年に大学を卒業後、都内の一般病院にて勤務を開始しました。臨床獣医師として働き出して間もない頃は、全ての業務が新鮮であり、覚えるべき内容の多さに忙殺されていたことを思い出します。

3年ほど経過した頃には、日々の診療において自信を持って対応することができるようになりましたが、突然の重症例に遭遇した際、何を優先して検査・治療をしていくべきなのか判断ができず、そのまま亡くなってしまったこともありました。

そういった経験から診療スキルの幅を広げる目的で夜間救急病院の存在を知り、門を叩いたことが救急を始めたきっかけです。

救急病院で勤務を開始し今年で10年となりますが、ここまで続けてこられたのも救急現場だからこその面白さ、重症患者を救命できた時の喜びが糧となるとともに、同級生や身近な後輩が同じ救急の現場で働いていたことも大きな支えとなっています。

日々の診療において、まだまだ自身の力不足を感じ

る部分も多く存在しますが、救急診療を通し1つでも多くの命を救えるよう日々邁進していきたいと考えています。

今回、高/低ナトリウム血症をテーマに、今号と次号(4月号)の2回にわたり症例をご紹介します。

ナトリウム濃度の異常は日常的によく遭遇するものの、苦手意識を持たれている先生は多いのではないのでしょうか。私自身もその1人であり、臨床を始めて間もない頃はあまり深く考えず漫然と治療を行っていました。状態が比較的安定している場合、その動物の持つ恒常性から支持療法などにより改善することが多いものの、重度のナトリウム異常に伴い臨床症状を呈しているような例では、治療内容によっては状態を更に悪化させてしまうケースも存在します。

今号では高ナトリウム血症を認め、治療に難渋した症例と治療に反応し良好な経過を辿った症例の2例をご紹介します。



#### 症例① 高ナトリウム血症・治療に難渋した症例

##### プロフィール

MIX猫、12歳、避妊雌

##### 主訴

振戦、2週間前から食欲低下。飲水量が低下。

消化器症状なし

##### 既往歴

リンパ腫(ステロイドの内服のみ実施)